



新潟の原風景といえば、どこまでも広がる豊かな水田。この景色は、確かに行き渡る水があって作られています。これは、水と農業、そして新潟の未来を考えるシリーズです。



小千谷市高梨町の信濃川土手を下流に向かって歩く。右手は河川敷の畑、樹々のすき間から川の流れが見える。左手は広々とした田園地帯、ここには信濃川から取水する用水路が整備され、十二分に供給されている。黄金色の波がゆれている。刈り入れて忙しい農家の人、土手を散歩する人、秋晴れの空の下、それぞれの時間が動いている。新米のどんぶり飯でも食うかいや、まずは冷たいビールとさる盛りの枝豆だな。

新潟市在住のイラストレーター木原四郎さんが、信濃川左岸流域を支える水の流れを訪ね歩き、風景や人とのふれあいを描いていただきました。

木原四郎の 水利を歩く in 信濃川左岸



イラストレーター
木原 四郎さん

1946年、佐賀県佐賀市出身。「旅するイラストレーター」として新潟県内を歩き、風景や人物を描き続ける。独特の柔らかいタッチのイラストと心温まる文章で人とモノとの出会いを紹介し、人気を集める。NHK総合「金よう夜 きらっと新潟」に出演。各地で展覧会も開催する。

小千谷に住む専業農家 太平由廣さんを訪ねた。魚沼コシヒカリを中心に二種類の酒米や業務用米など生産の種類も多い。それぞれ収穫時をずらしながら農地を有効に活用している。他にも転作としてソバ・大豆なども栽培。農業には水が命、清潔な水は稲の健康に欠かせない。供給される農業用水には心から感謝しているという。



水利再編し農地集積 全国初、注目の事業

関越自動車道を通り、小千谷ICを過ぎたあたりから西側に、なかなか丘陵が続いていく。

その山裾から信濃川左岸の平野一帯は、小千谷頭首工から引き入れた信濃川の恵みの水で豊かな実りを得ていた。

今度の国営土地改良事業は、老朽化した基幹水利施設の改修とともに、営農の変化に対応した用水需要とその安定を図ることを目的に実施される。

ところで、この地域の3次にわたる国営事業は、全国初という先駆性にひとつの特徴がある。

最初の事業は、戦後間もない昭和21年に認可された信濃川左岸土地改良事業である。緊急食糧増産という時代背景があったとはいえ、受益面積は今回の事業を863haも上回る5千364haという広さであった。

取水源である信濃川からの安定取水で生産力の向上を目指した土地改良事業は、地域では既に昭和17年ころから県に請願していた。それが年を追うごとに事業施行を望む懇請の声は高まり、ついに地域一帯17の用水組合に達した。

この声に押される形で新潟県としても国に陳情せざるを得なくなり、国営事業という制度のなかった時代に、国の直轄事業第1号として認可を勝ち得るのである。当時の人びとの結束力と先駆性が国を動かしたのである。

そして今度の事業もまた全国初となる「水利システム再編」を包含した国営事業となつていく。

すなわち、信濃川の河川形状の変化に伴う取水状況が改善されれば、水管理に苦勞をしていた経営体の労働時間が格段に軽減され、その分だけ経営の規模拡大が可能になるのだ。つまり、従来のほ場整備による〈面的〉集積の手法を、今度は水利再編という〈線的〉整備によって実現しようという先駆的な事業内容なのだ。

既に農家、行政機関、JA等による農地利用集積のための委員会も動き出し、国の期待も大きい。

明治末期、農協の源流・神谷信用組合をつくった住民の熱い血が、今も脈々とこの土地に流れているようだ。



新潟大学名誉教授
伊藤 忠雄さん

1944年、新潟県市生まれ。67年、新潟大学農学部卒。専門は農業経営学。同大教授、副学長などをを経て2010年に退職。15年3月まで放送大学新潟学習センター所長を務める。県内で活躍する農業経営者を招き意見交換する「新潟農業経営塾」を主宰。中山間地を歩き、「新潟の農」を積極的に発信し続ける。





中越は、
酒米の里でも
あるんです



加工用米
農

神谷生産組合株式会社
代表取締役
丸山 信昭さん(長岡市)

神谷生産組合の創立は減反政策が始まる以前の1969年。神谷集落が持つ田んぼの7/8割のほかに近隣地域を合わせ、およそ1000畧を耕作しています。コシヒカリの価格が良かった頃は酒米を作る生産者が多かった。長岡には朝日山と吉乃川など多くの酒造会社があるし越後にはかつて多くの杜氏(とうじ)を出した地域。だから酒蔵と一緒に頑張ってきた」と丸山信昭さん。現在、県内で生産される酒米の4分の1が神谷生産組合を含むJA越後さんとうのエリアで作られています。酒米は酒の品質を良くするため、タンパク質の含有量を目標値内に収めるなど、

他のコメとは異なる技術も求められますが、「それができる技術をちゃんと継承してきた。だからこそコシヒカリもおいしく作れる。1000畧の田んぼはブランド米・魚沼産コシヒカリの産地だけど、そのブランドがなくても味で信頼を得てきた」と言います。長岡市の旧越路町のエリアでは集落ごとに神谷生産組合のような団体があり「将来にわたって農地を生かし、若手に地元で働く場所を確保して技術を継承していく体制ができています。そうです。そして地域を挙げて酒米を含む全てのコメで5割の減農薬栽培を達成しています。

枝豆「一寸法師」を
長岡から全国へ

ナカムラ農産株式会社
代表取締役
中村 文和さん(長岡市)

一寸法師(枝豆)
農



多様な農業、 もうかる農業に夢を

信濃川左岸エリアは魚沼産コシヒカリの産地でもありますが、そのブランドだけに頼らない、多彩なチャレンジを繰り広げる人たちがいます。水利施設が整備されて水管理の労力が大きく減った分、「新しい特産づくり」「もうかる農業」へ。その取り組みは、地域づくり、後継者づくりにつながる道です。

里芋
農



もう一度、
長岡を里芋産地へ
追いかけてよう

JA越後ながおか
里芋生産部会会長
柳橋 孝則さん(長岡市)

長岡で、減反田を利用して里芋栽培が盛んになったのは40年ほど前。柳橋孝則さんは「一時は五畧と並ぶ生産量を誇った長岡を、再び産地にしたい」と、昨年から里芋生産部会を作り、品質向上と生産者増にに取り組んでいます。里芋は昨年採れた芋を植える自家採種の野菜。丸いと口当たりが良くなるため、なるべく丸いものを種にします。特に良い種は部会で買い上げて、新規で始める人に提供するという方式で品質向上と新規参入のハードルを低くする一挙両得を目指しています。



カリフラワー
農



小千谷のカリフラワーは
「白さ」で勝負

JA越後おちや
北部出荷組合長
和田 勉さん(小千谷市)

小千谷市の高には「黒ボク」と呼ばれる水はけの良い黒土の大地が広がっています。ここで育てられる代表的な野菜がカリフラワーです。日に当たると変色するため、一つ一つ葉をかぶせる手間を掛け「白さで勝負」するのが小千谷のカリフラワーだと和田勉さんは語ります。現在組合の作付面積は15畧ありますが、全戸開拓の産地づくりを目指して新規就農者を募集中。同時に「小千谷のカリフラワー」の知名度アップを図り、主に首都圏向けのPR活動を行っています。「東京の大田市場とスーパーを回ってきました。実際に食べてもらって、小千谷のカリフラワーのおいしさを知ってもらいたい」と話しています。

農

バターナッツカボチャ



「求められる食」作る
JR東日本に食材提供

有限会社ファームランドえちご
代表取締役
佐藤 昌佳さん(小千谷市)

ファームランドえちごは越後製菓株式会社の子会社で、社員食堂に食材を提供するなど、稲作と畑作を手掛ける法人。畑は4畧あり、芋類やキャベツ、カボチャなどを生産。ここで生産するバターナッツカボチャが昨年からJR東日本が首都圏の駅構内で展開する「ハニースーパー」で販売される「バターナッツかぼちゃのスイーツ」の原料になっています。JRの要望を受け、生産組合としての今年の生産量は2ト。スーパーが売られるのは1月下旬から3週間の予定ですが、佐藤昌佳さんは「来年も良いものを生産し、提供したい」と話しています。

支えているのは
信濃川の水。



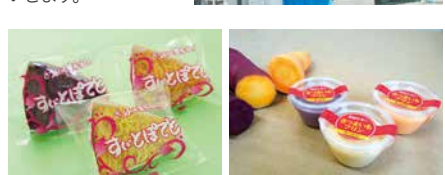
水利で
稲作を合理化
園芸で農家の
収入増を目指す

信濃川から取水する信濃川左岸流域土地改良事業は、小千谷市と長岡市にまたがる4500畧の水田に水を送り、新潟が誇る魚沼産コシヒカリを支えています。この地域で国営土地改良事業が始まったのは戦後間もない1946年。その後、施設の老朽化等により改良を続けてきましたが、こうした3度目の国営事業がスタート。水管理システムの合理化と、受益者である農家の水管理負担軽減が主な目的です。稲作にかかる水管理の手間が減ることで、空いた時間を野菜づくりなど現金収入が入る生産に充てることができ、農家の収入増が見込めます。



小千谷頭首工から安定的に取水し、新たな水管理システムを導入することで、水管理のための時間を軽減します。事業を通じ、担い手主導型の水供給システムへの転換を進めます。

小千谷、長岡地域は良質なコシヒカリ産地であると同時に、地域内に酒造、米菓などコメの加工メーカーが多く、酒米やもち米の供給地域。小千谷地域ではスイカ、メロン、カリフラワー、ソバなどが昔から栽培されています。長岡市では城下町の歴史を生かした「長岡野菜」に力を入れ、生鮮だけでなく加工品の開発も行っています。同地域は、コメだけでなく多様な農業が営まれてきました。今も、高速交通網で結ばれた首都圏との近さを武器に、大消費地に挑む取り組みが進められています。



自社生産のサツマイモを使ったスイーツ。

コメの価格低下と高齢化、後継者不足が進む中、園芸を産地化することは、農家の収入を増やすだけでなく、新規就農しやすい環境をつくることでもあります。小千谷市のカリフラワー、長岡市の里芋、いずれも新規就農者の負担を減らし、フォローする仕組みづくりを進めています。こうした取り組みには、農地を未来に向けて保全し、地域そのものを守り続けるという思いが込められています。

